慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	天理大学附属天理図書館蔵『ふくろのさうし』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.9 (1988. 6) ,p.59- 63
JaLC DOI	10.14991/002.19880600-0059
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19880600-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天理大学附属天理図書館蔵『ふくろうのさうし』解題・翻刻

石川　透

解　題

本誌前号の「天理大学附属天理図書館蔵『落窪物語抄』解題・翻刻」（『三田国文』第八号）に続き、同じく『落窪物語抄』所収の「ふくろうのさうし」（内題）を翻刻紹介する。目録題を『落窪物語抄』とする書物の性格、並びに書誌については前号を参照していただきたい。本解題では、「ふくろうのさうし」についてのみ、若干の考察を加えたい。

「ふくろうのさうし」は、その名の示す通り室町時代物語の一作品である。しかし、従来知られていた『ふくろふ（うそひめ物語・鳥物語）』とは、その内容が大きく異なる。すなわち、松本隆信氏『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に掲載された『ふくろふ』諸伝本のうち閲覧可能な伝本には、本書と同系統の作品は見出し得ないのである。

それでは、「ふくろうのさうし」の内容を紹介し、従来知られていた『ふくろふ』との相違点・類似点をみていきたい。

「ふくろうのさうし」の内容は以下の通りである。

近江国浅井郡田根庄木尾に、ふくろうのむくの介則次（則続）が住んでいた。弥生の中ばに則次が花見に行くと、折節五位の少将も来ていて、則次は一目惚れをする。則次は醍醐の薬師に祈請し、その甲斐あって、五位の少将に仕える白鷺の四郎に会う。則次は四郎に少将への気持ちを打ち明け、四郎も今昔の恋の例を話して則次を慰める。則次は一首の和歌を四郎に託し、四郎は少将のもとに帰り、このことを少将に話す。しかし、少将は手紙を返すようにと雀の八千世に運ばせる。則次はさらに和歌を記し、八千世に持たせる。八千世は持ち帰り、四郎と語り合って少将が返事を書くように勧める。とうとう少将は返事を書き、則次のもとに行くこととなる。少将は則次をあさましいと思いながらも、年月を経て、こふくろうを生む。こふくろうは二人に育てられ、それを見た烏達により和歌が交互に詠まれる。

以上のように、ふくろうを中心とする恋愛譚が本話の骨格である。室町時代物語の分類でいえば、異類恋愛物の中に入れるべきであろう。これが七五調の雅文を中心にして記されているのである。

これに対して、既知の『ふくろふ』の内容は、以下のようなものである。

加賀国亀割坂の麓に、八十三歳のふくろうが住んでいた。ある日、烏の九郎左衛門、鷲の新兵衛を近付けて、あねは山の管絃で琴をひいていた鷺姫が忘れられないので、手紙を届けて欲しいと言う。しかし、烏と鷲は、山雀のこさくに頼みなさい、と答える。ふくろうは山雀の宿に行き、頼むと山雀は了解したので手紙を細かに書いた。ふくろうは、み山の薬師によい返事を賜わるように願書を捧げる。一方、鷺姫は一度は手紙を受け取らなかったが、山雀に口説かれて返事を書く。返事を見たふくろうは、その内容を誤解したが、み山の薬師が夢に現われ、その意味を解き、阿弥陀堂で鷺姫と契ることになる。これによって諸鳥から和歌を贈られる。しかし、以前から鷺姫に懸想していた上見ぬ鷲は、討手を差し向け、結果的には鷺姫を殺害してしまう。ふくろうは、自殺しようと思うが、思い止まり、剃髪して諸国を廻り、鷺姫の菩提を弔った。

これは、『ふくろふ』諸伝本中、〔寛永〕刊絵入大本を底本とした有朋堂文庫本等を元にしたものである。この系統の伝本は最も多い。この系統以外の静嘉堂文庫本・東大国文学研究室蔵本も、それぞれ異同はあるが、大筋はこれと同じである。

以上の二つの内容を比較してわかる通り、両者はふくろうの恋愛譚という点で一致してはいるが、その細かな内容は大きく異なっている。特に、『ふくろふ』の方は、宗教的色彩が強く、多くの説話が入り込むなど、筋はより複雑である。実はその分量も、『ふくろふ』〔寛永〕刊絵入大本は、「ふくろうのさうし」の三倍以上もあるのである。

ただし、話型としては、ふくろうが恋をし、代理人を通して相手に文を送り、相手はこれを拒むが、やがて成就する、という点や、それぞれに薬師が重要な役割を果している点で一致している。さらに、『ふくろふ』のうち東大国文学研究室蔵本には、

ふくろうのむくのすけ殿

とあるように、ふくろうの官職名が一致している伝本もある。しかし、『ふくろふ』諸伝本のそれぞれが本文に影響関係が強く認められるのに較べれば、「ふくろうのさうし」の本文は『ふくろふ』からは完全に孤立している。

『ふくろふ』がより複雑な内容で比較的新しい印象を与えることを考えるならば、「ふくろうのさうし」の方が原型に近いのかもしれない。しかし、『落窪物語抄』のような抄出作品と一緒に収められていることを考え合わせれば、「ふくろうのさうし」が『ふくろふ』の筋を借りて作られた、と思われなくもない。いずれにしても、室町時代物語のことであるから、その成立の前後関係は速断できないであろう。

以下に、目録題『落窪物語抄』のうち、「ふくろうのさうし」の全文を翻刻する。翻刻に際しては、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、句読点を多く施した。

最後に、翻刻掲載の御許可を賜わった天理大学附属天理図書館に厚く御礼申し上げたい。（天理大学附属天理図書館本翻刻第四二六号）

ふくろうのさうし（内題）

むかしも今も恋ほどやさしき事はなし。人間の事は扨をきぬ、鳥類畜類までも恋をして心を尽す哀さよ。

所は近江の国あさ井のこほり、たねのしやう、きのをのかうのうち、むしは山に住鳥、名をはふくろうのむくの介則次とそ申ける。

比は弥生半の事成に、一むらさめのつれ〳〵に、花を見はやとおもへとも、あたりに花もなきまゝに、こうせんしと成らんに、花のあるよしきゝ、上なる山に立越、しものけしきを詠れは、寺はむかしにあれ果て、はにふのこやのいふせきに、花は昔の香を残し、色となる有様、都は未みねとも、地主のさくらや大原の、嵯峨うつまさの花にても、是にはいかてまさるへき。

おりふし五ゐの少将、是も徒然の余に、花を詠めていまひしを、則続一目みるよりも、心もそらにあこかれて、あるにもあらぬ風情也。五位の少将是を見て、恥かしけなる風情して、はねうちたれて立にけり。

則続心は爰にとゝまれ共、扨しも有へきにあらねは、我山さしてそ帰りける。

角て日数もつもりつゝ、おもひはいやましに成行は、朝夕ほう〳〵としたる有様を見、山がらすの声〳〵に、払ひのゝしる折〳〵は、腹立してそ居たりける。

兎に角に、昔も今も仏神にいのり申事は、必叶ふ事なれは、われもさこそとおもひつゝ、だひごのやくしへこもり、さま〳〵のきせいをそいたしける。

参籠のしるしにや、七日と申昼程に、いつくともしらす、白鷺一羽飛きたり。則次うちより、御身はいつくより御まいり候やらんと、くはしく尋ける程に、

我はこうせん寺山に住玉ふ五位の少将とのにつかはれ申、白鷺の四郎と申者にて候と、かたりけれは、

則続嬉しさ限なく、又はむね打さはきつゝ申けるは、申につけて憚おほく、又はうちつけなるやうに侍れとも、いつそやそのあたりの花の盛の折ふし、なかめゐ給ひし少将殿の御姿、一目見しより我心、ふかくそめなすからあいの、やしほも浅き袖の色、こかれあふみの悲しさに、此御寺にまいり、御ちかひをたのみたてまつる。その甲斐ありて、けふしも御身にあひたてまつる事、只他生のえんなりと、くはしく是をかたりけれは、

侍従も心ある物なれは、あれの上鳰も花の木陰にて、見馴ぬひとを見給ひて、はつかしなとゝつねに語られ候なる。扨も恋と云事は、御身ひとりにかきらす、昔も今もためしおほき也。

さ衣の大将は、あすかひの姫君を心をつくし玉ふとかや。光源氏の物かたり、しな〳〵おほき事なから、朧月夜の内侍のかみ、をほろけならぬちきりゆへ、須磨のうらみに身をこかし、藻塩たれしも誰ゆへと、わすれかねにし事とかや。

又在原のなり平は、二条の后をぬすみとり、武蔵野の煙にむねを焼、鬼一口にきもをけし、おもひのみちのおく迄も、まとひありきし物思へは、是も彼もたゝ恋路の行衛なるへし。

けに〳〵さやうにおほしめさは、ついにふみわけ給ふへき、ちきりの程はしらねとも、みちしはしにてまつらんと、濃〳〵語慰むれは、なのめならす悦て、心つくしの数〳〵を、いはゝおろかに成ぬ

へし。
心をみするよすかとて、一首の歌をそ書にける、
　余所に見し花の面陰晴ずのみ
　　心にかゝる折〳〵そうき
加様に書て引むすひ、侍従にたひけれは、暇申て帰りけり。
折節少将殿は、暮かゝる春の気色、物あはれに打詠ておはしけり。
侍従かへりて申様、をそくけかう申つれは、御つれ〳〵もさこそと申慰め、其後彼文取出し、有しなからの事共語けれは、
少将顔うちあかめて、さやうの人のことのはな、誠と誰か夕煙、あたになひかは秋風の、空にたつなをいかゝせん。ふみをはぬしに返せとて、手にふれしさへつらけにて、しやうし引立入けれは、
磯辺によする波の、うちかへさるゝたまつさを、雀の八ちよにもたせつゝ、むしは山へそ返しける。
則続八千世にかくなん、
　　ふみ見すは甲斐やあらんと神代より
　　ちきり定し天のはし立
加様にかきて引結ひ、なをこりすまに夕けふり、我心さへ恨めしと、涙なからに立出て、八千世にこそは出しけれ。
やちよ程なく帰り来て、おもひこかるゝありさまを、侍従と友にかたりつゝ、左耳人のつれなきも、報ひある世と承か、人のしたひもとけ給ふへき事は、御心のまゝにてこそ候へ。一筆の御返事に、人の心をなくさめられ候へかしと、申けれは、
実もとやおもひけん、うすみとりのうすやうに、いとはつかしけにてかくなん、
　たのましな立ゐる雲のあたにのみ
　　心さためぬ花のまよひは
とかきてさし置けれは、侍従取あけ、御返事とてやりにけれは、
則次なのめならす悦て、つゐにいひより吉日をそ定めける。比は卯月なかはの事なるに、むしは山へむかへけり。
むくの介嬉しさに、爰へ〳〵はう〳〵とそよびたりける。
少将は声うちきくより、あさましや、おなし生を請るならは、やさ敷人ともちきらすして、姿から声からひと〳〵敷もなくして、空の気色もはれぬれは、のりつけ〳〵との給ふも、けすしくたえ〳〵敷もおもへとも、藤から咲みたれ、時鳥折〳〵をとつれかゝる気色になくさみて、年月を送りける程にくはいにんして、いたいけしたるこふくろうをそまうけける。
ふくろう余のうれしさに、目もはなさすなかめつゝ、うしろの方にてあそひけるを、あまりにみをくりける程に、くひはくる〳〵まはるとかや。
こふくろうはほう〳〵とあまへけれは、母の少将はきやあ〳〵とそすかしそたてける。
からすうちにてかくなん、
　　ふくろうのふくたのしけなる有様は
　　わらふ烏のことはりそかし
とわらひけれは、ふくろう返し、
　　夏からす何にかさ程ゐひぬらん
　　口あきゐたるさまのきたなさ
と返しけり。又五ゐのよめる、
　　はやふさのなき世なりせはいか計
　　こいの心の長閑からまし

又しら鷺のよめる、

ねらふへきとしやうもみえぬ海口に
身のけさへたつ雪のしら鷺

すゝめのやちよかくなん、

雪はふれ賤かかきねの村雀
ほろひいすかた哀ともみよ